きっと誰かのために

震災発生から2カ月余り、被災地では一歩一歩復興に向けて進み始めています。一人一人の立場でできる事、さまざまな形での支援、自分たちが今できる事に精いっぱい取り組みましょう。先月号でお伝えした以降の市などの動きと、現地へ赴いた人からのお話、市民の皆さんの取り組みなどを紹介します。

市の被災地支援状況　5月12日現在

◇義援金受付　36,682,166円
◇避難者の受入状況　6世帯　20人
◇住宅の提供　36件受付
◇就労情報の提供　4件受付
◇市拠出義援金　2,000万円（岩手、福島、宮城の3県へ1,500万円、友好都市などへ500万円）

【関連情報】（13・19ページ）
被災市町村から避難されている皆様へ

4/15 岩手県遠野市
市長ほか職員3人訪問
義援金226万円
（市から100万円、職員から126万円）

4/15 宮城県多賀城市
市長ほか職員3人訪問
義援金100万円

4/16～5/22 宮城県東松島市
職員のべ4人
自治労復興支援活動
（行政事務支援、復興作業等、）以後継続

5/2～7 岩手県大槌町
現地でのボランティア活動に市内から26人が参加
安曇野市社会福祉協議会が募集して実施

4/20 長野県栄村
副市長ほか職員2人訪問
義援金200万円

5/9、10 福島県郡山市、南相馬市　市長ほか職員3人訪問
南相馬市へ義援金100万円

4/30～7/31 福島県郡山市
（富岡町役場機能移転先）
職員のべ26人
全国市長会職員災害派遣
（行政事務支援等）

4/8～14 岩手県陸前高田市
保健師1人　災害派遣による松本市・塩尻市・安曇野市合同チーム（保健師活動、5/12以降も派遣）

4/5～12 宮城県多賀城市
水道関係職員4人
長野県第5次派遣部隊
（給水活動）

～～～電力消費を抑えよう～～～

この夏、東日本大震災や浜岡原子力発電所停止の影響で電力不足が懸念されています。例年夏に電力消費のピークを迎えることから、市民・事業者・行政が一体となって節電に取り組みましょう。

●節電のためのアクション
□ 冷房時のエアコンの設定温度は28℃を目安に
□ 身の周りの余分な照明を消す
□ 使わないときは電化製品の主電源を切る。コンセントのプラグを抜く
□ 冷蔵庫に物を詰め過ぎない。設定温度は弱める
□ 洗濯物はまとめ洗いする
□ 乾燥機や電気便座は極力使わない
・・・それぞれの工夫により、節電に取り組みましょう！
皆さん一人一人の節電アクションが、大きなうねりとなり、電力消費をおさえることに繋がります。
問生活環境課環境保全係　TEL82・3131　FAX82・6622

～被災地への支援に赴いて

その時できることを

配送用の車でこのような長距離は走らないので、少し不安もありました。もうひとりの職員と片道700キロの道程を、夜通し12時間かけて交代で運転しました。

遠野市自体に大きな被害は見られませんでしたが、そのすぐ先に深刻な被災地があるという事で、直接そのような所へ届けたいという気持ちもありましたが、この時点ではできる精一杯の事をしたのだと思っています。

実際に大きな被災地に入っていれば、もっと何かしなければ帰って来られない気持ちになったと思います。

自分が消防団に入っている事もありますが、帰り道、応援に行く近隣消防団の車とすれ違うと、胸が締め付けられる思いでした。

平林丈明（たけあき）さん（穂高有明）
3.14～15 災害救援物資輸送（第1次）で岩手県遠野市への灯油輸送に従事。
ＪＡあづみ灯油配送センター勤務。

特別でなく

社長の「ボランティアに行ってくれるか」の言葉にピンと来ました。原発の話はありましたが、行く事に不安は一切ありませんでした。ただ、夜間となった道中は、街や高速道路の電気も消え違和感がありました。着くと現地にはまだ届いた物資も少なく、本格的なものは自分たちの物資が第一弾のような印象でした。

特別な事をしたとは思っていませんが、個人ですぐにできる事ではありませんし、早く届けられて良かったと思っています。

阪神淡路大震災の後も仕事で行きましたが、今回の被災地は全く違うと感じます。とにかく現地が一番大変なのに、直接被害のなかった地域までが、過剰な買い占めや行事の自粛など、混乱するのはあまり良くないと思います。この先も限られた事かもしれませんが、自分のできる事をやっていきたいと思います。

松澤幸宏さん（堀金烏川）
3.18～19 遠野市への災害救援物資輸送（第2次）に会社の4人と共に従事。
有限会社　郷美興業勤務。

継続的な支援を

地震発生から1カ月後の被災地入りでしたが、市の中心部である沿岸地域は津波で何も無く、さら地のような状態でした。市職員は300人中68人死亡、保健師も7人中2人しか残っておらず、庁舎も記録もありませんでした。そんな中、「避難所だけでなく全戸訪問により安否や健康状態を確認して欲しい」との依頼で一軒一軒訪問しました。

住民の方は、家族や家・財産・思い出をすべて失い、疲れ切っていましたが何とか復興したいと頑張っていました。被災時の様子や家族への思いを、涙ながらに話す方もいました。すべてのインフラが崩壊し、医療・福祉・介護などのサービスが止まった不安な生活。すべての方が被災者でした。

限られた時間・過酷な状況の現場など初めての経験でしたが、被災された方々の犠牲を教訓にすると共に、現地には今後も継続した支援が必要と感じました。

藤原陽子保健師　4.8～14
松本市・塩尻市・安曇野市の合同チームの1人として岩手県陸前高田市竹駒地区において保健師活動に従事。
（明科保健センター勤務）

それぞれが連携して

市内で活動するボランティアやＮＰＯ、市民活動団体などが参加しているネットワーク、「えんがわ・ネット」は4月28日、被災地ボランティアとして活動した人や、現在被災者を受け入れている人などから話を聞きながら、「今、何ができるのか」「これから、何をすべきなのか」を考えるワークショップを開きました。

被災地で実際にボランティア活動をしてきた人からは、「圧倒的に人手が足りない」「色んなボランティアの仕方がある」「今後はきめ細かい活動が必要」などと報告され、「今後、それぞれが連携しながら長く支援を続けていく事が大切」とし、事務局の市社会福祉協議会からは、「ボランティアの情報提供や保険の手続きなど、まずは相談して欲しい」と話がありました。

4.28 えんがわ・ネットによるワークショップ　市内ボランティアやＮＰＯ、社会福祉協議会、市などが情報を交換した。「して欲しい支援とできる支援をどうつないで行くかが課題」などと活発な意見が出されました。